

2021年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

満帆にして満載の宝船
艶を増し日の臘梅の香を溶かす
草に木に命の艶を呼ぶ二月
春立つやテラスに残る昨夜の豆
籠植ゑのすずなすずしろ茎立てる

八王子 石井 蓉子

一人居に二つの荷物聖夜かな
工賃に加へボーナスでふ快拳
水仙香に励まされている通所かな
人の無き公園冬日独り占め
午前四時師走の月に目覚めたる

町田 小森 まさひこ

路地さらに狭めてポインセチアかな
勝独楽や人情深川ご利益通り
猿廻し芸人だけが乗ってをり
御神渡り縦横にして蝦夷の湖
境目はきつとどこかに流水原

松尾芭蕉

於春々大哉春と云々
山里は万歳おそし梅の花
門松やおもへば一夜三十年
元日は田毎の日こそ恋しけれ
天秤や京江戸かけて千代の春

2021年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

新たなる風北窓を開けしより
ダンディーなシルバーグレイ猫柳
感涙は拭はぬままに卒業す
風葬の森と伝えて百千鳥
落日の翳りを重ね夕桜

八王子 石井 蓉子

空晴れて子らの笑顔やお正月
通所する道そこここに霜柱
砂遊びもうすぐ春が来るもんね
春立つや通院通所欠かさずに
春一日家事の一日となりけり

町田 小森 まさひこ

禍の世に地虫の出でにけり
逆さ富士映す湖みくさ生ふ
羽根休め寝るのもありて春田かな
ほおばってうぐいす餅の粉にむせ
ターミナル出で二十五分の梨の花

2021年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
夏めくや磨きあげたる食器棚
筋書の無き夢重ね明易し
短夜や決心未だつかぬまま
六月や髪存分に切りつめて
ぶつかって身をくづしたる火取虫

八王子 石井 蓉子
桜散るあたしはいつも一人きり
囀りの元気で歩めと鳴きにけり
陽を返す白花水木の遊歩道
桜咲く朝の公園一人きり
桜咲く幸せいっぱい夢いっぱい

新宿区 壺守 圭子
葉擦音渦巻く音や春疾風
葦の角湖水の揺れに動かざる
富士映す湖を縁取る桜かな
踏みしめて草の芽息吹を足裏に
山々に白藤揺れている甲斐路

町田 小森 まさひこ
露天湯の屋根の代はりの青簾
軽鳧の子の列の乱れる最後尾
ニュータウンと呼ばれ街の緑なる
万緑を財産として村まもる
檸檬花この色にしてあの味に

2021年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
白玉や母の齡へあとわづか
水中花生きる証の泡ひとつ
気怠き香たて山梔子の花の錆
怯む身に追ひ打ちかける残暑かな
籠り居に馴染み残暑の街俯瞰

八王子 石井 蓉子
澄渡る五月の空の夜明けかな
母の日は母は元気なだけでいい
洗い髪幸せきつと来るやうな
夏椿の一輪散っている夕べ
サイダーをごくごくごとと飲みかけり

新宿区 壺守 圭子
八の字でぐるぐるの輪の匂ほひけり
青葡萄懇切丁寧袋掛
犬の舌長々として夏来る
夏至の日の朝を開く羽音かな
夏至の旅長き日が終はりたる

町田 小森 まさひこ
根釧の地平線まで牧薄暑
海霧の間に北方領土らしき島
海霧の夜の五里に届きし霧笛かな
玫瑰の空透き通ってをりにけり
万緑の縁取る湖にまりも生ふ

2021年9～10月掲載分

2021年11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

ひねくれる辛さを艶に唐辛子
手すさびの鬼灯三つ目も破れ
冷ややかに次の検査の予定また
昏れ残る光の蛇行川の秋
燃え尽きてゆく華やぎに草紅葉

八王子 石井 蓉子

風呂あがりアイスクリームのより旨し
とぼとぼ帰る道々法師蟬
幸せが来る予感して髪洗ふ
午後六時秋の気配の確かなる
百日草ほろほろほろと散りにけり

新宿区 壺守 圭子

花火の香静もる闇の残りけり
昨日今日温度差十度秋暑し
熟れ桃を丸ごと食んで汚す肘
お供えに育てし菊を切りにけり
歳時記の重さも捲る長き夜

町田 小森 まさひこ

連綿とホトギス山脈天高し
その先は葛葛葛で行けません
芋水車北アルプスの水引いて
平原を渡る霧笛や二十キロ
コスモスの色の境を歩きたし